

城生佰太郎先生履歴

1946（昭和 21）年 3 月 24 日 東京に生まれる。
(この間の詳細な履歴については、『実験音声学と一般言語学』を参照のこと)

1965（昭和 40）年 4 月 東京外国語大学外国語学部モンゴル語学科 入学
1969（昭和 44）年 6 月 同 卒業
1969（昭和 44）年 7 月 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程
アジア第一言語専攻（モンゴル語学） 入学
1971（昭和 46）年 3 月 同 修了
1971（昭和 46）年 4 月 1 日 東京外国語大学外国語学部モンゴル語学科 教務補佐員
～1974（昭和 49）年 3 月 31 日
1974（昭和 49）年 4 月 1 日 筑波大学 非常勤講師（音声学概論ほか）
～1980（昭和 55）年 11 月 30 日
1974（昭和 49）年 6 月 1 日 東京学芸大学教育学部 講師
～1981（昭和 56）年 3 月 31 日
1980（昭和 55）年 12 月 1 日 筑波大学文芸・言語学系 講師
～1989（平成元）年 3 月 31 日
1989（平成元）年 4 月 1 日 筑波大学文芸・言語学系 助教授
～1997（平成 9）年 4 月 30 日
1997（平成 9）年 5 月 1 日 筑波大学文芸・言語学系 教授
～2004（平成 16）年 3 月 31 日
2004（平成 16）年 4 月 1 日 国立大学法人筑波大学大学院人文社会科学研究所 教授
～2009（平成 21）年 3 月 31 日 （2009 年より筑波大学名誉教授）
2009（平成 21）年 4 月 1 日 文教大学文学部 教授
～2016（平成 28）年 3 月 31 日

学会

1969（昭和 44）年 5 月 日本言語学会（1991-2008 委員、2009-2011 評議員）
～2015 年 3 月
1969（昭和 44）年 6 月～現在 日本音声学学会（1989-現在 評議員）
1970（昭和 45）年 6 月～現在 日本モンゴル学会（1983-1987 役員）
1972（昭和 47）年 6 月 日本フランス語学会
～2009（平成 21）年 3 月
1972（昭和 47）年 6 月 日本語学会（2003 年まで国語学会、2004 年に改称）
～2010（平成 22）年 3 月
2004（平成 16）年 11 月～現在 一般社団法人波の会日本歌曲振興会（名誉会員、
2004 年 11 月 5 日まで社団法人日本歌曲振興会）
2008（平成 20）年 8 月～現在 日本実験言語学会（2008-2016 会長、現在 顧問）

学位

1971（昭和 46）年 3 月 16 日 文学修士、東京外国語大学
2004（平成 16）年 3 月 23 日 博士（学術）、国際基督教大学

非常勤講師歴一覧

2005 年度までの非常勤講師歴については、『実験音声学と一般言語学—城生佰太郎博士還暦記念論文集—』（2006、東京堂出版）に掲載されているので、そちらをご参照いただきたい。

2013（平成 25）年 4 月 1 日 学校法人湘南ふれあい学園 茅ヶ崎リハビリテーション
～現在 専門学校 言語聴覚学科：音声学

2016（平成 28）年 4 月 1 日 文教大学大学院言語文化研究科博士後期課程：博士論文指導
～現在

城生佰太郎先生業績一覧

以下に、城生佰太郎先生の業績一覧を示す。なお、2005年度までの業績については「城生佰太郎教授業績一覧」として『実験音声学と一般言語学—城生佰太郎博士還暦記念論文集—』（2006、東京堂出版）に掲載されているので、そちらをご参照いただきたい。ここでは、『城生佰太郎教授退職記念論文集』（2009、言語学論叢特別号、筑波大学 一般・応用言語学研究室）に掲載された2006～2009年度の業績である「城生佰太郎教授業績一覧補遺」の誤りを修正して再掲し、その後ならびに現在刊行予定のものまでを掲載する。

（構成：福盛貴弘）

業績一覧総合目録

I 学術業績

1	学術著書	39冊
2	学術論文	89本
3	翻訳	4本
4	辞典・事典類	16冊
5	口頭発表	18件
6	論説・書評など	63本

II 音声・映像業績

1	学術用音声・映像資料	14本
2	日本語教育能力検定試験対策用音声教材	2本
3	言語教材	1本
4	幼児言語教育映像教材	7本
5	幼児言語教育教具	14体
6	社員研修用教材	1本
7	教科書別記指導書	1本

III 啓蒙・社会活動業績

1	一般書	21冊
2	新聞・雑誌などの取材記事	77本
3	講演会	75件
4	放送関係出演	348本

業績一覧補遺

I 学術業績

1 学術著書

2006(H18)

35. 「実験音声学の研究手法」『実験音声学と一般言語学：城生佰太郎博士還暦記念論文集』52-60. 東京堂出版

2008(H20)

36. 『実験音声学入門』サン・エデュケーショナル 187p.
※『実験音声学』(ビデオ、DVD)に対応する活字概説書。映像版とあわせて見ると当時の実験と現在の実験に隔世の感があることが確認できる
37. 「命名を考える」宮地裕・甲斐睦朗編『「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版』意味 2: 13-21. 明治書院
38. 『一般音声学講義』勉誠出版 279p.
※30年以上にわたる講義内容の集大成と位置付けられる概説書。2010年に初版第2刷。
39. 「実験言語学の提案：事象関連電位を用いた言語研究の可能性」宮地裕・甲斐睦朗編『「日本語学」特集テーマ別ファイル 普及版』IT 関連 2: 32-42. 明治書院

2 学術論文

2006(H18)

69. 「ヘブライ語の歴史的シュワに関する音響音声学的研究」『現代ヘブライ語の音韻体系に関する実験音声学的研究』103-109. 科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：16520227 研究代表者：池田潤）研究成果報告書

2007(H19)

70. 「脳波を用いた実験音声学的研究から見た英語の音声教育」『現代英語の発音辞典：発音のコツとクリニック』58-65. 科学研究費補助金（萌芽研究 課題番号：17652066 研究代表者：島岡丘）「英語が使える日本人のための発音指導の研究」研究成果報告書
71. 「兼常清佐の実験音声学」『近代日本における音楽観：兼常清佐を中心に』53-55, 73. 科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：17520086 研究代表者：蒲生美津子）研究成果報告書
72. 「実験音声学研究方法論考：科学研究における帰納的方法論の再評価」『日本語学研究』18: 1-10. 韓国日本語学会
73. 「モーラの正体再考：ERPを用いた実験音声学的研究」『文藝言語研究』言語篇 52: 23-36. 筑波大学大学院 人文社会科学研究科文芸・言語専攻

2009(H21)

74. 「誘発脳波を用いた音節がらみの諸問題に関する実験音声学的研究」『言語学論叢特別号 城生佰太郎教授退職記念論文集』（大橋紀子と共著）185-210. 筑波大学一般・応用言語学研究室

75. 「脳波を使った音声・言語研究：発出者の視点から受容・認知の視点へ」 1: 6-18. 日本実験言語学会 <日本実験言語学会会長就任演説会長基調講演>

2010(H22)

76. 「社会音声学序説：ラングとパロールの中間に関する一考察」『文学部紀要』23-2: 87-98. 文教大学

77. 「音便の音声学」『文教大学国文』39: 1-11. 文教大学国文学会

2011(H23)

78. 「古典日本語の動詞活用パラダイムに関する音法論的考察」『文教大学国文』40: 21-28. 文教大学国文学会

2012(H24)

79. 「翻訳の意味論」『言語と文化』24: 105-123. 文教大学大学院附属言語文化研究所

80. 「音声学的アクセントと音韻論的アクセント」『文教大学国文』41: 12-21. 文教大学国文学会

2013(H25)

81. 「ある日本語音声教材の現状を憂う」、『言語と文化』25: 24-45. 文教大学大学院附属言語文化研究所

2014(H26)

82. 「モンゴル語学における若干の先行研究：音声学・音韻論関係の紹介とコメント」『文学部紀要』27-2: 51-70. 文教大学文学部 <研究ノート>

83. 「文献学的アクセント」を考える、『言語と文化』26: 57-86. 文教大学大学院附属言語文化研究所

84. 「モンゴル語母語話者を対象とする日本語音声教育の諸問題」『文学部紀要』28-1: 51-74. 文教大学文学部 <研究ノート>

2015(H27)

85. 「「談話」という学術用語への不満」、『文教大学国文』44: 12-19. 文教大学国文学会

86. 「音声言語研究半世紀：実験音声学と実験言語学」『言語文化研究科紀要』創刊号:19-41. 文教大学大学院 <研究ノート>

87. 「実験言語学序説」『実験音声学・言語学研究』7: 1-43. 日本実験言語学会

2016(H28)

88. 「母音と子音の間で」『文学部紀要』29-2: 23-53. 文教大学文学部 <研究ノート>

2017(H29)

89. 「音声学と構音障害：言語聴覚士をめざす人たちのために」『実験音声学・言語学研究』9: -. 日本実験言語学会

4 辞典・事典類

2007(H19)

14. 『日本語学研究事典』(飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 編) 明治書院 1380p.

2011(H23)

15. 『音声学基本事典』(城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男編著) 勉誠出版 540p.

近刊予定

16. 『日本語学大辞典』(日本語学会編集委員会編) 東京堂出版

5 口頭発表

2012(H24)

18. 「文献学的アクセント」を考える：プロヴァンス語の音響分析を通して」日本実験言語学会第5回大会 文教大学 9月1日

II 音声・映像業績

1 学術用音声・映像資料

2008(H20)

9. 『ビデオ音声学(上)』DVD版 サン・エデュケーショナル
10. 『ビデオ音声学(下)』DVD版 サン・エデュケーショナル
11. 『実験音声学(上)』DVD版 サン・エデュケーショナル
12. 『実験音声学(中)』DVD版 サン・エデュケーショナル
13. 『実験音声学(下)』DVD版 サン・エデュケーショナル

※1988年に刊行された『ビデオ音声学』と1991年に刊行された『実験音声学』が、DVD版となって再刊行された。

4 幼児言語教育映像教材

近刊予定

7. 『キヤット・チャット』リニューアル版監修、TBS

7 教科書別記指導書

2006(H18)

1. 『新編新しい国語 教師用指導書』音声CD/データCD-ROM3 東京書籍

III 啓蒙・社会活動業績

1 一般書

2007(H19)

19. 『旅のお供に 今すぐ使えるモンゴル語入門』CD付 (チメツツェレン・アマルズルと共著) 勉誠出版 196p.

2012(H24)

20. 『日本語教育の音声』勉誠出版 156p.
21. 『日本語教育の語彙』勉誠出版 162p.

2 新聞・雑誌などの取材記事

2007 (H19)

71. 「私が音声学を研究するようになったわけ」言語学出版社フォーラム リレーエッセイ
<http://www.gengof.com/>
72. 「単語を覚えなくても抜けるデゴザルの巻」『キクタン英会話』2: 78-79. アルク

2009(H21)

73. 「設立と学会誌創刊のご挨拶」『実験音声学・言語学研究』1: 1-2. 日本実験言語学会
2012(H24)
74. 「日本語学執筆者 100 人の歩み：音声・音韻」『日本語学』31-14: 39. (11 月臨時増刊号)
 明治書院
75. 「学者への道」『文学部紀要』29-2: 55-66. 文教大学文学部 <エッセイ>
76. 「父母と教職員の会に感謝感激」『文教大学父母と教職員の会会報』116: 5. 文教大学父母
 と教職員の会
77. 「退職にあたって」『あいたで会報』100: 4.

3 講演会

- 2006(H18)**
67. 「実験音声学と音声科学」韓国日本語学会第 14 回秋季学術大会 (招聘講演)ソウル：東国
 大学校 9 月 23 日
- 2007(H19)**
68. 「実験音声学の貢献：英語の発音指導を目指して」(科研報告) 聖徳大学 2 月 11 日
69. 「美しい日本語」群馬県立女子大学主催 平成 19 年度県民公開授業 群馬県立女子大学 5
 月 26 日
70. 「実験音声学研究方法論考：聴取者の観点からの言語研究」第 2 回国際公開講座 専修大
 学 10 月 20 日
- 2008(H20)**
71. 「脳波を使った音声・言語研究：発出者の視点から受容・認知の視点へ」日本実験言語学
 会設立記念大会公開基調講演 筑波大学 8 月 29 日
- 2012(H24)**
72. 「音声学的アクセントと音韻論的アクセント」韓国関東大学校 (招聘講演) 8 月 20 日
- 2014(H26)**
73. 「城生佰太郎一代記：音声学と言語学」文教大学創立 70 周年記念講演会 10 月 4 日
- 2015(H27)**
74. 「母音と子音の間で」日本英語音声学、早稲田大学 7 月 12 日
75. 「音声言語の重要性」文教大学夏期講座、文教大学 7 月 31 日

4 放送関係出演

- 2007(H19)**
346. 「スーパーカメラ 芸人検証「小島よしお」『未知の世界を撮りたい驚き㊦映像ハンタ
 ー！ ドリームビジョン 年末スペシャル』日本テレビ 12 月 20 日
- ※小島よしおのオッパッピーを科学するというコンセプトで実験音声学の立場から検証し、
 人気の秘密を探った。
- 2008(H20)**
347. 『Growing Reed』FM J-WAVE 10 月 26 日
- ※ナビゲーターは V6 の岡田准一氏。
- 2012(H24)**
348. 「世界を魅了する日本の歌謡曲～由紀さおり ヒットの秘密～」『クローズアップ現代』
 NHK 総合 TV 制作 2 月 21 日

<緊急企画>

研究者が出演するテレビ番組のあり方

テレビ・ラジオに多数出演された城生佰太郎先生。私も幾度となく現場に立ち会ったことがあるが、2012年のNHK『クローズアップ現代』については、筑波大学への移動中に車内で意識を失ってしまったため現場に立ちあえなかった。私事だがそれ以降約1か月間の記憶がなく、3か月にわたる入院を強いられたため、放送がどのようなようになったのかを把握できなかった。退院後かなりたってから放送を確認したが、構成もコメンテーターもひどいものであった。昨今のテレビ番組に対して出演した研究者からクレームが入るケースが増えつつあるのが理解できた。今から思えば、私が倒れたのは悪い予感の予兆だったのかもしれない。

閑話休題。昨今の学術成果を利用した番組では、誠意あるスタッフもいる一方で、傲慢あるいは無知・無理解によって、ただのとんでも番組しか作れないのがある。そういった背景をふまえ、城生先生ご自身の古希記念論集の場を借りて、先生からNHKあてに送られた抗議文を公開することが、これからの研究者に益するところがあると判断した。城生先生に許可をいただいたうえで、本ページ下段より原文をそのまま公開している。今後、各種メディアから出演依頼が来た時には、一応の覚悟をもって出演される方がよいということに気づいていただければ幸甚である。なお、プロデューサー、ディレクターの実名については、私の判断で氏名を伏せている。

(企画・構成：福盛貴弘)

「NHK クローズアップ現代に対する抗議」

城生佰太郎

2012.01.30.に、NHK クローズアップ現代担当ディレクター△△ △△氏の来訪を受け、急遽制作した資料。番組の構成は、

- 1.目的：由紀さおりのブレイクした理由を探る
- 2.方法：(1)アメリカに行って、4人の人にインタビューする
(2)3人の学者による検証を行う。分野は、音楽学、音声心理学、音声学。
- 3.結果に基づく討論：スタジオで、司会者とアメリカ人アーサー・ビナードによる対談。

なお、この放送は視聴率 15.3%を記録した(ビデオ・リサーチ調べ)。

世界を魅了する日本の歌謡曲 ～由紀さおり ヒットの秘密～ 視聴率 15.3%

私は、次ページ以下に添付した抗議文をNHKに叩きつけ、以降の番組出演を拒否した。

21日放送のクロ現制作に関与した人間の一人として、強く抗議します。

結論を先に述べれば、今回の制作態度は、真摯な思いで学問をやっている人間を愚弄するものであり、あのような傍若無人な制作態度を看過することは、我が国を代表する公共電波発信元であるNHKの将来にとって、そして国際的なレベルでみた映像文化一般にとっても、決して褒められた態度ではないことを訴え、学者の立場から断乎抗議します。

1. 番組の流れ

1.1.目的：由紀さおりのブレイクした理由を探る

1.2.方法：(1)アメリカに行き、4人の人にインタビューする

(2)3人の学者による検証を行う。分野は、音楽学、音声心理学、音声学。

1.3.結果に基づく結論：スタジオで司会者とアメリカ人アーサー・ビナードによる対談。

2. 問題点

2.1.総論

あらかじめ、ベン・Eキング、トーマス・ローダーデール、それにニューヨーク在住の一般市民1名（ウラジミール・ゲオルギエフ）らによって指摘されている「心に自然や海が浮かぶ」「夏のそよ風のような美しさ」「浮世絵のようなただよう感覚」といった情緒的な文言を、スタジオにおいてアーサー・ビナードがダメ押しする。

上に述べた本線の流れに対して、木に竹を継いだように、ほんの申し訳程度に学者を適切にちりばめて、一般の視聴者に番組の権威と正当性を押し付ける。この部分が、最大の問題点である。

2.2.各論(1)制作に際しての根本的姿勢

芸術論を展開するのか、それともある現象に対して科学的な検証をするのか、プロデューサーのこの点に関する根本的姿勢がぐらついており、結果としてこの作品を失敗に導いている。つまり、上の2.1.で述べたように「はじめから結論ありき」の、トップダウンによる演繹的方法で番組作りをしており、現象と真摯な態度で対峙するという姿勢が見られない。

せっかく識者の考えを取材しているのだから、そこから上がってきた事象をうまく吸い上げつつ番組の結論を導くという、ボトムアップによる帰納的方法論の欠如がこの番組を散漫なものとしてしまった最大の敗因である。

2.3.各論(2)目立ったエラーについて

気づいた範囲で、エラーについて報告しておきます。

(a)音楽学の先生が、Puffのなかから次の部分を抜き出して「日本語では同じフレーズに盛り込める単語数が少なくなる」と述べているが、たしかに訳詩の場合には一般論として日本語の「拍(またはモーラ)」という単位と印欧語に見られる子音優位の音節構造とのギャップが

ら、そう言えなくもない。しかし、このことを「同じ意味を表すのに日本語では多くの語数を要する」と単純に誤解されると困る。その証拠に、そのような逆の例が、本番組のあとの方で示された具体例に出ている(図1)。この点は、ひとこと番組内で断るべきであったと思う。



図1 英語より日本語の方が単語数の多い例

図1から明らかなように、このケースでは英語が3単語であるのに対し、日本語は7単語ということになり、倍以上の単語数を要する。ちなみに、語数をカウントする際には辞書に見出し語として掲載されているものを一応の目安とするのがよい。そうすると、日本語の例は「わたし」「は」「あなた」「を」「あいし」「て」「います」となって7語である。ついでに指摘しておく、日本語のローマ字表記が間違っている。「watasiha」ではなく、「watashiwa」である！

これでお分かりいただけたと思うが、音楽学の先生が Puff の中で分節していた日本語も、言語学的レベルから正しく切れば、「みどり」「の」「うろこ」「ならし」「て」「泣い」「た」となるので英語が11単語であるのに対し、7単語も入っている勘定になり、それほどの大差にはならない(図2a,b)。



図2a 英語 11 単語



図2b 日本語 7 単語

日本語は、「みどり」「の」、「ならし」「て」、「泣い」「た」と切るのが正しい。

(b) 音声記号の誤り

電話取材による安易な方法を取ったため、十分なコミュニケーションがとれなかった。
音声心理学者の出演場面で用いられたフリップの音声記号は、正しくは

[aïlʌvju:] または [aïləvju:]

となる。この表記で、[i] は「音節副音」といって、母音ではない。だから、全体で母音の数は3個と言えるのであって、フリップのように表記してしまうと4個と言わなければならない。

(c) フォルマンントの扱い

城生 侖太郎出演場面で、大幅にカットしてしまったために、「声のよさ」「厚み」「透明感」「豊かさ」などを示唆する声道の共鳴パラメータを表しているフォルマンント（周波数成分集合）の扱いが粗雑で、あれでは半分しか説明できていない。△△さんには何度も口頭で注意したように、本数だけではなく出現する位置や強さ（グラフ上では黄色く光っている部分）にも注目し、これらを擦り合わせなければならない。ちなみに、私は警視庁公安からの委嘱で脅迫電話の声の鑑定をして NHK のニュースに出演したこともあり、個人の特定に関する専門的知見もあわせ持っている。

(d) アーサー・ビナードの発言

「大学の先生が出てきて、フォルマンントの本数がどうだとか、音声心理学がこうだとかと言うけど」という文言は、われわれ学者を愚弄するものであり、謝罪と訂正をお願いしたい。

以上。

2012年2月23日